

うれしい、予期せぬプレゼント

宮 本 富 夫

(高松大学 名誉教授)



先だって、思いがけず勝浦座による「傾城阿波の鳴門」人形浄瑠璃公演を観る。公演は地域の校区コミュニティ協議会が高齢者を地域で支え合うまちづくり推進事業の一環として開催した行事。私には「傾城阿波の鳴門」を再度観賞できる機会、うれしいプレゼント。当日、運良くほぼ中央に位置する二列目の席で観ることに。すぐ目の前で展開される人形の巧みな動きが目。裁縫する人形の腕と手のしなやかな動きは格別。太夫の語りと三味線の音が耳、そして体に。演者の思いと気迫が伝わる。胸の奥からこみ上げるも

のあって、目頭が熱くなる。三味線の音はことのほか強烈に体に響く。気づくと、体が音に共鳴している感覚。このような体験ははじめて。こんなこともあるんだ、この歳になっても。自身、不思議な境地を味わう。すてきな時が流れ、心豊かに。演者の方に感謝。送り主に感謝。地域の子どもたちに観賞して欲しかった。

公演の場は小学校の体育館。それなりの場面設定がなされているものの、音響といい、場の雰囲気といい、阿波十郎兵衛屋敷の会場とは少し隔たりがある。なのに激しく心揺さぶられる。

演者の思いがひしひしと伝わる。何年か前、阿波十郎兵衛屋敷を訪ね、「傾城阿波の鳴門」に心揺さぶられたこと、頭の中で重なる。人形浄瑠璃の世界では、黒は存在すれど見えないものと教える。見えないものと想像すると、人形使いの黒子の存在は意識の外に。不思議なものである。意識を変えると頭の中は見えないものに動かされる見えるものの世界に。脳の情報処理機能の不思議さ、想像することの楽しさ、あらためて気づく。

人形浄瑠璃の語りと三味線の音色をはじめて聞いたのはずいぶんと前のこと。新人生歓迎セミナーで淡路島の国立青年の家に滞在したときであったと記憶する。当時、ともに滞在していた高校生の団体が人形浄瑠璃を観賞されている会場近くをたまたま通りがかり、漏れてくる語りと三味線の音色に心動かされる。人形の動きまで覗き見るに至らなかったが、ずっと心のどこかに残り、いつか観賞したいという思いが続く。職を離れ、ようやくのこと

で時間に余裕、今まで気にかかりつつ、やり残していることができる状況に。一年に何度かそのために時間がとれるようになったことに感謝しつつ、思い残しを減らしていくことに。そんな折、長年の思いがかない、阿波の十郎兵衛屋敷を訪ねる。人形浄瑠璃とはじめて対面する。演目は「傾城阿波の鳴門」、一段。自分の体と心が語りと三味線の音色に揺さぶれていることに気づく。よかった、機会があつたら再度観賞したいという思いも。

どうして三味線の音色が私にとってこんなに心地良いのか。何か弦楽器の演奏ができるわけでもない。音の世界に造詣があるわけでもない。不思議でならない。音色がどこかで刷り込まれたのかもしれないが、記憶はない。あるとすれば、遠く、記憶が及ばないどこかで。ひょっとしたら、私のDNAのどこかに三味線の音色を心地よく感じさせるといった情報があるのかもしれない。あれこれと想像を逞しゅうする。曾祖母は医家から嫁入りし、毎日

三味線を弾いているような女性だったと聞いている。家業を手伝わなくてもいいから、言外に一日中三味線を弾いていてもいいから、ということでは嫁入りしたとも聞く。たぶん、祖父と父は、成長期のどこかで三味線を聞いたことだろう。しかし、家で見かけた三味線を二人が手にすることを見た記憶はない。家で三味線の音を聞いたことはない。私も三味線を手にしたことはない。だが、音色に無性に惹かれる。興味深いことに、長女と次女は学生時代にそれぞれ三味線と三線を手に取り、演奏のためとて練習を重ねていた。二人ともどこかで楽器と出合い、惹かれる何かを感じたのだろうと思う。なぜ惹かれるのかと、尋ねたことはなく、その理由はわからない。

琉球大と縁のあつた次女と沖縄の友人宅を訪ねると、居合わせた友人の父上が何気なく三線を持ち出され、演奏を始められた。演奏が進むにつれ、ジーンとくるものが胸にこみ上げ、涙がこぼれそうになった。どういった曲

で、どういった思いを込めて演奏されたのか、たずねる心の余裕もなくしてしまった。対面での三線演奏ははじめて。懐かしく思い出す。私にはなぜか、弦に由来する音が耳に、体に心地よい。もしかしたら、ヒトは弦の音色に共鳴する何かを持ち合わせているのではないかとまで想像してしまう。

師走に思いがけず人形浄瑠璃を楽しみ、年明けに届いた「酒林」の表紙を見てびっくり。そこには「傾城阿波の鳴門」のワンシーン、母と子の姿。間なしの人形浄瑠璃の世界との思いがけない出合い。これもプレゼントか。偶然の一致だろうが、見えないつながりを感じ、何となく心うれしい。暮れの公演を思い出しつつ、特集記事を読む。江戸の時代に始まったとされる人形浄瑠璃が淡路島、徳島と、それぞれ引き継がれ、現在に至っているという。関係者のためみないご尽力に感謝。鑑賞できる機会が与えられることに感謝。人形浄瑠璃が引き継がれゆくことを切に願う。

大木惇夫詩集『海ばらにありて歌へる』今村均陸軍大將

宮地 智子

(詩人)

昭和十六年十二月末・第十六軍司令

官付き宣伝報道部の一員として徴用され、インドネシアに渡った詩人の大木惇夫は、同じく徴用されていたジャーナリストの大宅壮一と同じ輸送船に乗っていた。司令官は今村均大將で、当時に中將であった。戦う敵はインドネシア人ではなく、インドネシアを三百年もの長い間植民地支配していたオランダであり、またオランダの連合国であるアメリカ、イギリス、オーストラリアであった。

敵前上陸寸前、バンタム湾において、敵の巡洋艦を轟沈させたものの、敵の魚雷により撃沈され、重油まみれの海に漂い命からがら椰子林の浜辺に上陸したのであった。

この戦いは現地インドネシアの人々の協力によって、ほぼ十日ばかりで日

本は連合国に勝利したのであった。直ちに軍政をしいたその政策は、極めて

宥和的であったので、日本とインドネシア友好のための歌を募集して発表を開いたりした。大木惇夫は、その音頭をとった一人でもあった。また、現地で詩集を出版している。『海ばらにありて歌へる』という題名は今村大將がつけ、編集万般は北原武夫、跋文は浅野晃・宮沢有為男・大宅壮一の三人が書いている。序文を書いた町田敬二中佐は、この戦いが尋常ならざる戦いであり、祖国の気魄と共に征く日本兵は総じて詩人となるのであり、^{よわい}齡知命に近い大木惇夫は詩の出陣をしたのである、と言っている。

これを戦争讃美であるなどと言って戦後になって非難することは全くの見当違いである。「戦友別盃の歌」を引

用する。

——南支那海の船上にて
言うなかれ 君よ わかれを
世の常を また生き死にを
海ばらのはるけき果てに
今や はた何をか言はん
熱き血を捧ぐる者の
大いなる胸を叩けよ
満月を盃にくだきて
暫し^{しば} ただ酔ひて勢^{きよ}へよ
わが征く^ゆはバタビヤの街
君はよくバンドンを突け
この夕べ相離^{さか}るとも
かがやかし南十字星を
いつの夜か また共に見ん
言ふなかれ 君よ わかれを
見よ 空と水うつところ
黙々と雲は行き雲はゆけるを

赤道を超えジャワ島上陸寸前に敵の魚雷によって沈められた輸送船「佐倉丸」には大宅壮一も同乗していたのであった。バンタム部落の椰子林に辿り着いたのは昭和十七年三月一日の未明のことであった。

当時、独立運動の闘士であったスカルノは投獄されていたのであり、人々の日本軍への歓迎ぶりはいたる所で見られ、この様子を目のあたりにした今村大將は思わず、「いったいここは戦場だろうか」と洩らしたくらいである。さて、戦後、昭和四十四年に出版された『大木惇夫詩全集』において、大木惇夫は附記として次のように書いている。

「あの、生涯の旅人であり、平和を愛していたであろう松尾芭蕉、私の尊崇する松尾芭蕉がもし、国の徴用をうけて戦場にたつたとしたら、どうしたであろう、どんな態度でどんな作品を生んだであろう。このことは、戦場でも常に私の第一の関心事であった。戦後二十数年を経た今日でも私はそのこ

とをししばし思わずにはいられない。」戦争協力者として白眼視されていたことへの怒りというより哀しみの深さを滲ませた言葉として受けとることができよう。

外征の直前、伊勢神宮の神前にぬかづき、「大廟をひたにかしこみおろがみつ 武運を祈る心も失せて」とうたつた今村大將と同じく聖戦を戦った一人の日本人として、詩人としての役割を見事に果たした、というだけのことであって、その功績は讃えられこそすれ、貶められてはならないのである。重油まみれになつて上陸した直後の詩をあげる。

椰子樹下に立ちて

—ラグサウーランの丘にて

極まれば 死もまた軽し

生くること何ぞや重き

大いなる一つに帰る

永遠とわの道ただに明るし

わが剣は海に沈めど

この心 天をつらぬく

明かる妙 雲涌もよほく下に
散り落つる花粉か あらぬ
椰子の芽の黄なる ほのなる
ほろほろと しずこころなし

祖国の亡命を賭けた戦いであつてみれば、その気魄は、第一詩集の昌頭の詩、「風・光・木の葉」の繊細かつ優しさに満ち溢れた情趣と同根なのである。

風・光・木の葉

大木惇夫

一すじの草にも

われはすがらむ 風のごとく

かほそき蜘蛛くもの絲にも

われはかからむ 木の葉はのごとく

蜻蛉あきつのうすき羽はねにも

われは透すき入らむ 光のごとく

風・光

木の葉とならむ 心むなしく

国際色豊かなウィーンで

型絵染アートの展覧会とワークショップ

―日本・オーストリア友好一五〇周年記念行事―

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター)
イラストレーター

前回に引き続きウィーンでの展覧会についてお話し
ていきたい。

展覧会を開催したギャラリーはオペラ座の近くの路
面店だ。国際色豊かなウィーンの街はギャラリーを訪
れた人達からも伺えた。スイスのベストセラー作家は
「ハイドン教会とエスターハージー城」、「ノイジード
ラ湖の夕暮れ」の二点を購入した。この作品は、日興
修好一四〇周年の展覧会に合わせて、ブルゲンランド
の印刷会社によって出版されたカレンダーの原画の一
部だ。ドイツの現代アート美術館の館長は「栗林公園
の松」を購入した。国際会議の合間に訪れたフィンラ
ンドの女性、アメリカ人もいた。

通りがかりの人も気軽に入ってきた。気にいれば躊
躇なく買ってくれた。ヨーロッパの人々にとって、芸
術というものは人生に必要な不可欠なものということが
自然に身についているのかもしれない。

世界博物館で開催したワークショップは有料にも関
わらず、通常の二、三倍の受講者が集った。舞台美術
などのアート関係者、日本文化に興味あるオフィスワ
ーカー、サンフランシスコからの旅行客など様々だっ
た。体験だけでなく、型絵染アートの工程について映
像を流しながら約一時間講演した。受講者や博物館か
ら好感触が得られ、創作意欲の刺激になる楽しい時間

だった。日本大使館では主婦が多く直ぐに定員に達した。日本文化に関心を寄せる人が多いことは喜ばしいことである。

型絵染アートが日埃交流の一助になれたなら嬉しい事であり、充実した日々を過ごせたひと月だった。



型絵染アート「ハルシュタット」(オーストリア) さかもと ふさ

「ホール」の力

山本 千明
(英会話講師)



ここで登場するのは《私と真里亜さん》そして【三人の一流の方々】である。元々接点の無い人達が時空を越えて繋がり始め「ある時」を境に「中心点」に集結することになる。

今から五十年前。「新御三家」が人氣絶頂の時代に《私》は「浜畑賢吉さま」一筋だった。NHK時代劇の「將軍吉宗」を演じる凛々しいお姿を、テレビ画面ごとカメラで写し「秘蔵アルバム」に貼りつけてウットリ眺める毎日。ところがそんな女子中学生の思いを余所に「憧れの君」は僅か数年でテレビから姿を消してしまわれた。

それから二十七年後。「たまたま」

つけたテレビに懐かしの浜畑さま！そのインタビュ番組で、私は初めて「將軍様」が「劇団四季の舞台俳優」だったことを知る。

偶然その番組を見かけた三年後に私は「水谷さん」と出会った。政治家の石破茂さん風の紳士だが「香川に芸術文化を根付かい！」と燃える「行動の人」である。地元銀行の地位を捨て「夢」を抱いて民間企業へ。そこから県民ホールの館長となる。様々な芸術活動を推進する傍らで「子供達に生の舞台を味わってもらいたい」と、十七年間「劇団四季ファミリーミュージカル」を招致されていた。「たまたま」

実行委員をしていた義姉に誘われ軽い気持ちで参加したミーティングでの自己紹介。四季の舞台を見たこともない私の口から「四季といえは」に続けて咄嗟に出た言葉は「浜畑賢吉さんが大好きです」だった。すると水谷さんは私の顔をまじまじと見て一言。「浜畑くん？ 僕、メル友だよ」

その二年後、私は卒倒しそうな緊張の中に居た。高松市内のレストラン。目の前には珈琲とチーズケーキ。そして私の右隣りには夢か現か幻か「浜畑賢吉さま」ご本人。「戦場の天使」出版記念の朗読会を終えて参加された「親睦会」の席である。水谷さん

のご厚意による「特別席」は畏れ多すぎて平伏したい気分だったが、浜畑さんは私の持参した「秘蔵アルバム」に優しく微笑みながらサインをしてくださった。

《真里亜さん》とは二十二年前、英会話講師の研修で知り合った。女優の杉本彩さん似の知的美人。仕事も遊びもエネルギーに熟す姿からは想像もつかないが、彼女の過去には暗黒の時代があった。二十三歳から腎臓病による療養生活。外出すらできず、涙にくれる日々が五年も続く。その長いトンネルの先でようやく「奇跡的な寛解」を告げられ、「再発しないうちに」と真つ先に出かけたのは「憧れのパリ旅行」。その旅先で「たまたま」聴いたのが【古澤巖さん】のバイオリンだった。「涙が溢れ、あまりの感動でその場から動けなくなつた」という。それから二十年以上、彼女は古澤さんのコンサートに通い続けている。「この音色を聴く為にずっと元気でいる！と決めてから一度も再発してないんで

す」と彼女は笑った。

二〇一七年。観音寺市にスタイリッシュな市民会館（ハイスタッフホール）が完成した。そこを「中心」として不思議な「引力」が働き始める。

その初代館長に就任されたのは、情熱と行動の人【水谷さん】だった。

演劇活動が稀だった観音寺に「開館記念事業」として「市民ミュージカル」が旗揚げされた。二〇一八年、伊吹島が舞台の小説を基にした「ウラが住んどる不思議の島」が上演される。脚本と演出は【浜畑賢吉さん】。地元の小學生他、四十五人がステージで生き生きと歌い踊る微笑ましくも見ごたえのある舞台に満席の大ホールは拍手に包まれた。

その市民ミュージカル公演の三か月前、もう一つの「開館記念事業」が開催されていた。「世界最高峰」ベルリンフィルの弦楽五重奏団×【古澤巖さん】のコンサートである。そしてその時《真里亜さん》は「主催者側」に立っていた。古澤さんは元々、県内の

お寺の奉納公演をされていたが、お寺の住職さん達が「たまたま」真里亜さんの知り合いだったことで主催の話が現実となったのだ。当初、県内の会場候補は幾つかあったらしい。しかし「たまたま」日程が合ったのがオーブン間もない「ハイスタッフホール」だったのだ。若き住職さん達の情熱サポートに加えて「水谷館長との出会いと、ご協力なしには実現できなかったコンサートです」と彼女は語る。「香川の人達にもあの感動を味わって欲しい」という「途な思いで「重責」を担った彼女だったが事態は思わぬ方向へ動き出す。

大ホールは、木をふんだんにあしらった「プラウン」が基調のシックな造りだが、「たまたま」ここで演奏された古澤さんは驚き「世界にこれ以上のホールがあったら出してみる、というほどの素晴らしい音響です」と絶賛された。そして真里亜さんは古澤さんのコンサートをこのホールで定期的に主催する運びとなる。「天空からキラ

キラと降り注ぐダイヤモンドダストのようなバイオリンの音色」に感嘆した人達は「感動を分かち合いたい!」と誘い合って会館に足を運ぶようになった。そして古澤さんは二〇一九年なんと「観音寺市ふるさと応援特別大使」に就任される。

この宇宙には強い重力で時間や光まで取り込んでしまう「ブラックホール (hole)」なるものが存在するらしいが、ハイスタッフホールは「情熱の人」を引きつけて離さない「ブラウンホール (hall)」なのかも知れない。

コロナ禍で春々夏の「市民ミュージカル」や「古澤巖コンサート」は「延期」となってしまう。人影疎^{まばら}になった市民会館の角で六月から、無農薬米や朝採れ野菜が並ぶ「日曜朝市」が始まった。「観音寺を元気にしたい!」と地域商社「せとうちイート(株)」を設立した男性が「たまたま」拠点に決めたのが会館に隣接する「まちステーションSara」だったのだ。彼の娘さんは「小学校の親友が出演し

たミュージカル」に感動して「私も出たい!」と第二回「星の王子さん」に出演したという。「厳しい練習のお陰で格段に歌が上手くなりました」と嬉しそうに笑った。この「小さな女優さん」は順延となった「夢つむぎの詩」に出演できる日をずっと心待ちにしている。



妖魔悪鬼の地獄国（二）



池 田 一 貴

六（訂正）

最初に筆者の記憶違いを訂正しておきたい。前回、最後の段落で述べたことに記憶違いがあった。朝鮮の改革者でクーデタに失敗し、日本に亡命中だった金玉均を、李氏朝鮮政府が巧みな嘘で上海におびき出し、拳銃で殺害した上、その遺体を朝鮮へ持ち去り、遺体に対して凌遲刑^{りようちけい}という残酷な刑罰を加えたことを述べた。

これはもちろん歴史的によく知られた事実であるが、これに対して福沢諭吉（金玉均は福沢を師と仰いでいた）が涙を流し、朝鮮を「妖魔悪鬼の地獄国」と呼び捨てた、と書いた。

しかし、福沢が時事新報にこう書いた時日に關して筆者の記憶違いがあった。福沢が「地獄国」云々と書いたのは、金玉均の殺害と遺体処刑の直後ではなく、もっと前の時点、すなわち金玉均が甲申事変（李氏朝鮮末期の閔氏政權打倒のクーデタ）の失敗で日本に亡命した直後に、金一族の女子供から従者まで全員が凌遲刑によって誅殺（九族皆殺しに）された、その直後に、福沢が怒りの言説（地獄国）を発表したのである。有名な「脱亜論」は、「地獄国」論説の翌月のことだった。

つまり筆者は、金玉均の家族が凌遲刑を受けた時点（甲申事変の直後）と、金玉均自身が殺害さ

れ凌遲刑を受けた時点（甲申事変の九年後）とを混同していたのである。

以上、お詫びして訂正します。

★なお前回もお断りしましたが、本稿は儒教社会のマイナスイ面を扱っています。当然、陰惨な話も多く、中国や韓国が大好きという人には幻滅を与える虞（おそれ）があります。ご諒承ください。

七 死者に鞭打つ

王や政府自らが嘘をつき、敵対者（や部下）を暗殺し、さらに死体に対しても処刑や暴行を加えるのは、朝鮮のみならず中国にも見られた事実である。もともと中国的・儒教的な死生観・靈魂観から来た行為だから当然といえど当然だが。朝鮮は儒教受容とともにその死生観・靈魂観にも影響を受け（約二千年間）染め上げられた。中国にはまだ道教・仏教・墨家思想など他の選択肢もあったが、朝鮮（特に李朝以降）は儒教それも朱子学のみを強制されたから、儒教教条主義に陥った。今やそれは朝鮮土着思想と呼ぶにふさわしい。

さて、中国の歴史書に残る屍体「処罰」の実例として有名なものは、伍子胥の仇討だ。

春秋時代のことである。楚の平王に仕えていた父・伍奢と兄・伍尚が平王の嘘と陰謀により殺さ

れた。伍子胥は逃げ、復讐を誓うが、逃亡中、筆舌に尽くしがたい困苦にあえいだ末、他国（呉）で出世し力をつける。やがて好機到来。兵法の天才・孫武（『孫子の兵法』の著者）が呉王に迎えられ、楚を攻略することになった。楚の地理と内情に明るい伍子胥と、軍事の達人・孫武という人材が揃い、呉は連戦連勝して楚を陥落させた。

しかし、楚の平王は既に死んでいた。そこで伍子胥は王墓を暴き、平王の死体を引きずり出し、三百回も鞭打って恨みを晴らした。「死者に鞭打つ」「死屍に鞭打つ」という表現はここに始まる。つまり紀元前五〇六年が、中国の記録に残された最初の屍体処罰ということになる。

伍子胥は父と兄の仇を討ったわけだが、しかしそれは屍（しかばね）を相手に恨みを晴らしたものだ。前にも述べたように、中国では人間が死ねば「たましい」は魂と魄に分かれ、魂は天へ上昇し、魄は白骨に付着したまま土中に埋葬される。屍には魄といたたましいが付着している、すなわち、たましいがあるなら屍体も痛みを感じるに違いない、魄は高度な思考はできないが喜怒哀楽を感じる能力はある、とされる。そんな思い込みから、屍体を「苦しめる」ために暴行や処罰が行なわれたわけである。

つまり死者に鞭打つのは、単なる見せしめでも自己満足でもない。死者の「魄」に激痛を与えるという一種の土着信仰的な報復行為なのである。我々日本人から見れば、やや滑稽な行為だが、中国人にあつてはかなり真剣な思い込み（死者も激痛に苦しむ）に基づく行為なのである。（もちろん洋の東西を問わず、これが死者を冒瀆する行為であることは言うまでもない）

八 破墓と剖棺斬屍

この儒教的思い込みは現代にも生きている。マルクスの唯物論を奉じる共産党は、霊や魂魄の存在など信じないはずだが、現実には違う。唯物論者であるはずの中国共産党の重鎮らは、なぜか、墓が暴かれることを極度に恐れていたのである。例えば、周恩来や鄧小平がそうだ。彼らは自分が死んだら必ず火葬せよ、骨灰は海や空に散じよ、と命じていた。死後、墓から屍体が引き出され、痛めつけられることを異常なほど恐れたのだ。

実際、日中戦争で日本との友好関係を築いた汪兆銘（汪精衛）南京政府主席は死後、反日派中国人によって墓を暴かれる恐れがあった。汪兆銘は九年前に反日派から狙撃された傷が悪化し、日本軍医の手術でいったんは快方に向かったものの

結局、癌が悪化して名古屋帝大病院で死去。遺体は首都南京へ運ばれた。妻の陳璧君は将来の墓墓きを恐れて、頑丈堅固な墳墓を造った。

後年、墳墓址に中共当局が掲示した立札にはこうあった。「陳璧君怕日後被毀棺鞭尸」と。「陳璧君は今後、棺が毀され尸（しかばね）が鞭たれるのを怕れた」と。そのため五トンもの鉄鋼粉入りコンクリート製シェルで固めた墳墓を造り、その奥深くに夫・汪兆銘の遺体を安置したという。

しかし日本が米国に降伏した直後の一九四五年九月九日、蒋介石は鉄鋼入り墳墓を爆破してまで墓を暴き、汪兆銘の遺体を毀損した。妻はまさか墓が爆破されるとは想像だにできなかっただろう。陳璧君は戦後獄中で死んだが、やはり墓暴きを恐れたのか、火葬され散骨された。

なお、中共当局が「毀棺鞭尸」と古代的観念に基づく立札を設置したのは二十一世紀も近い一九九四年のことである（五年後撤去された）。

二千年以上も儒教を奉じてきた中国人は、その魂魄観念から土葬を行ない、火葬を忌避してきた。死の民俗・儀式というものは非常に保守的なもので、政治体制が変わった程度では変化しない。共産党政権下でも、例えば紙銭を焚く儀式などは続いている。

周恩来や鄧小平は、汪兆銘と同時代人である。

当時をよく知っているし、墓暴きと屍体暴行・凌辱を死後最大の苦痛と怯えていた。それならいっそ遺体焼却の方がマシだと思ったのだろう。むべなるかな。(ただし近年、中国は墓地不足から法律で火葬を強制する方向にある)

一方、韓国ではつい最近、二〇二〇年六月、文在寅政権の与党「共に民主党」の一部議員らが戦没者墓地「顕忠院」で集会を行ない、「親日派」軍人の「破墓」(墓破り。墓掘り返し)を主張した、と朝鮮日報が報道した。

文在寅派議員のいう「親日派」軍人とは、一九五〇年の朝鮮戦争で北朝鮮の侵略に対し命をかけて戦い、戦死した人々である。かつて日韓併合時代に日本軍の指導を受けた将校が多く、彼らなしでは北に負ける恐れもあった。韓国にとっては殉国の英霊である。なのに、かつて併合時代に日本に協力したという遠い過去を蒸し返して、墓破り(墓を掘り返し亡骸を移葬か破棄)するとうのだから何をかいわんや。野党の未来統合党の中からは「反人倫的な剖棺斬屍(棺を割き屍体を斬る)だ」と反発の声も出ているそうだ。

「毀棺鞭尸」といい「破墓」「剖棺斬屍」といい、中国と朝鮮半島には、おぞましい儒教の亡霊

が、今も徘徊していることに驚かされる。彼らが日本の靖国神社の英霊を祭祀対象から引きずり降ろそうとする動機の根底にも「剖棺斬屍」の思想がある。彼らは外見は近代人だが、心性は今なお古人である。心はおぞましい「妖魔悪鬼の地獄国」なのだ。

福沢諭吉が「脱亜論」で、この二国とだけは付き合うべきではないと主張したのは、あらためて正鵠を射た達見といつて過言ではない。

九 儒教経済圏のウソ

ここで少し寄り道をして、儒教と日本とのかかわりについて触れておきたい。

欧米諸国には東アジアの中国・香港・台湾・韓国・日本を「儒教経済圏」と捉える見方がある。戦後のめざましい経済成長を示した国々がそこに含まれているからだ。

日本が敗戦の焦土と貧困からいちはやく立ち直り、急速に世界第二の経済大国となり、ついで香港、台湾、韓国が次々と成長の波に乗った。その共通点を探した欧米の不勉強な学者が「儒教経済圏」などと、重大な発見でもしたかのようにもてはやしたのだ。むろん間違っている。

香港の成長はかつての統治者・英国が資本主義

の下地をつくっていたからであり、同様に、台湾と韓国の成長は、かつて日本が併合時代に大規模なインフラ投資と教育を施し、経済成長の土台をつくっていたからである。もし「儒教」が成長の原動力ならば、肝心の中国が停滞したままだったことの説明がつかないだろう（共產主義は停滞の理由にならない。初期のソ連は数次の五カ年計画で急成長した）。

要するに、儒教と経済発展とは関係ない、ということだ。しかも、日本を儒教国というのも間違っている。

儒教研究者に限らずあらゆる学問分野の研究者は、自分の研究が役立つことを強調するために、その専門分野が日本社会に及ぼした影響を過大視する傾向がある。例えば、儒教学者は、儒教が日本に影響を及ぼした一例として、仏教儀式の一部である仏壇の位牌が、じつは儒教から来たものだと得意げに指摘したりする。

なるほど位牌そのものは儒教儀式の用具であるが、日本の神道にはもともと神霊が依り付くための「依代（よしろ）」を崇める信仰があり、それは具体的には樹木、柱、石、御幣、人、動物などであった。その樹木や柱を小さな板にしたものが位牌なのだから、それを無理に儒教と結びつける必要は

ない。あえて言えば、神道をベースにした仏教・儒教の合作ともいえるよう。

同様に、儒教「思想」が過去の日本社会に及ぼした影響を過大視する学者もいるが、一体、日本庶民がどれだけ儒教思想を受け容れたのか、端的な例を挙げれば学者はとたんに論破される。

その例とは「男女七歳にして席を同じうせず」や「男女は親（みづか）ら授受せず」などの男女の接触に関する厳しい制限である。中国・朝鮮ではこれは嚴格に守られた。しかし、日本は「同席」どころか「混浴」すら許されるほど男女関係におおらかな社会だった。庶民は寺子屋で論語も習ったが、それは知識にとどまった。実際の庶民生活上、儒教規律の影響は露ほどもなかったのである。（江戸時代の人口の一割程度を占めた武士は、確かに儒教を奉じたが、中国・朝鮮と違い、朱子学より陽明学を重んじる者も多く、国学とも結びついた）

十 儒教社会の男女交際

中国・朝鮮では古代以来、二十世紀になってからも一般の青少年男女が言葉を交わしたり接触したりすることは厳しく制限されていた。七歳以降、女子は自由に外出することもできない。思春期や青春期の男女が自由に出会い、恋愛すること

など儒教社会ではありえないことだった。男女隔離・交際禁止の社会だったのだ。こんな儒教社会の基本すら日本人は知らされていない。

だから中国の代表的な恋愛小説とされる『紅樓夢』（十八世紀、曹雪芹の作）において、主人公で貴公子の賈宝玉の恋愛の相手は、父方の従妹である林黛玉や、母方の従姉である薛宝釵など、恋愛対象のほとんどが従姉妹や又従姉妹、姻戚関係者など、要するに親戚ばかりなのである。若い男女が広い大邸宅で出会えるとしたら親戚以外の可能性はほとんどない、という現実を反映した設定になっているわけだ。

一般に、女子は十代後半の適齢期になると親が結婚相手を決める。日本の見合いと違って、娘本人は見たいこともない知らぬ男に嫁ぐ。相手が醜男であろうが老人であろうが親の決めた男に嫁ぐしかないのだ。それが儒教社会の慣わしだった。愛もへったくれもない。女性は子を産む道具なのだから。

そんな社会だから、纏足という女性隷属性を象徴する非人間的な社会慣習も可能だった。ひとりでは自由に歩くこともできない娘が、嫁いだ性的玩具としてもはやされたのだ。

一方、男はどうか。青年期に性欲をもてあまし

たら遊廓で女郎を買う。一般の（素人の）女性と出会う機会はほとんどないから、恋愛とはどんなものか経験のしようがない。金持ちの息子は女郎を相手に恋愛ごっこ（繰り返しの登楼）をすることもできたが、ふつうの男はそうもいかない。成金の息子でも、性交の伴わない精神的な恋愛があることなどは知るよしもなかった。

男も結婚に関しては、親の命令に従うのが儒教社会の慣わしである。つまり親が決めた相手と結婚するしか選択肢がなかったのである。

精神的恋愛のない儒教社会はまことに偏頗である。本来恋愛は人生を左右する事件であり、男女関係は生命活動の根源である。『源氏物語』という恋愛小説が日本のみならず世界で賞讃されるのも、恋愛を通じて人生と世の中の真実が垣間見えるからだ。だが儒教はそれを刺身のツマか人生の付録、裏話としか見ない。単なる性欲処理の尾端と見下す。恋愛の豊かな世界を知らない儒教社会では、男女関係に精神的な愛が伴わず、いきなり見知らぬ相手と性交にいたる。男女がそれぞれ、そうなのだ。歪というほかない。儒教社会にはレイプが多かったという話も聞けよう。

そういう社会では男女関係が情緒に欠けるのも致し方ない。美しい恋愛など夢物語なのだ。

近代中国の知識人・戴季陶（戴伝賢）も自国に對する厳しい認識を披瀝した。彼は孫文の片腕で、中華民國の考試院院長をも務めた人物。日本に長期滞在した経験があり、流暢な日本語を話し、日本の政治や文学に精通した文人である。

彼は著書『日本論』（一九二八年）で、日本人と對比して、中国人を「打算的」と喝破した。とりわけ人間の生命活動の原点たる男女関係における中国人の「虚偽と打算」を痛烈にこきおろす。「中国人の男女生活は索漠悲哀の極み」であり、「家庭でも燃ゆるが如き愛の結合が見出せない」ばかりか「非公式な男女の結合でさへ例外なく冷たい計算が働いてゐる」と断じた。

一方の日本では、女郎の心中（情死）までもが打算のない純愛だと賞讃する。日本の武士道と同時に恋愛をも激賞したのである。明治維新を実現し、日清・日露の戦争に勝利した日本文化に對する畏敬の念が彼にはあつた。その日本論は一九一九年頃から断続的に発表された。

次いで日本人の厨川白村の著『近代の恋愛観』（一九二二年）も注目を集め、中国語に翻訳されると「厨川白村現象」とも呼ぶべきブームを起した。同書は主に近代西洋の恋愛を説いているのだが、その一節にこうある。

「動物よりも進化した人間生活に於ては、両性関係は簡單なる性欲作用よりも、更に進展し昇華して、既に至高の道德となり信念となり芸術となつてゐる」云々と。

道德といへば儒教しか思いつかない中国人にとつて「恋愛」が「至高の道德」であり信念であり芸術である、という言葉は、目が眩むほどの認識の転換ではあるまいか。もちろん、すぐにはついて行けない人も多かつただろうが、そういう新しい考え方もあることを若い人々は知つた。

それに引きかえ、儒教の鼻祖たる孔子は、男女関係について、一体どんな教えを垂れていたのだろうか。



(表紙説明)

■日本酒の発酵

日本酒の発酵は、デンプンが分解されて糖分になる働きと、糖分がアルコールに変わる働きが同時に進行します。これがワインなどの発酵と異なる点です。

「酒林」随筆特集 第一〇〇号

令和二年九月一日発行

発行人 西野 信也

印刷所 株式会社 太陽社

高松市紺屋町九番地六号
高松大同生命ビル八階
発行所 西野金陵株式会社

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

〔本 店〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
〔高 松 本 社〕
〒760-8544 香川県高松市紺屋町9番地6 高松大同生命ビル8F ☎087-826-4133
〔高 松 支 店〕
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
〔土庄営業所〕
〒761-4121 香川県小豆郡土庄町湊崎甲545-1 ☎0879-62-0101
〔丸亀支店〕
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
〔徳島支店〕
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
〔松山支店〕
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
〔岡山支店〕
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
〔洲 本 支 店〕
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
〔大阪営業所〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-4133
〔東京営業所〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-5543-4133
〔観音寺物流センター〕
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1 ☎0875-56-3133
〔多度津工場〕
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
〔琴 平 工 場〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
〔金 陵 の 郷〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

〔大阪本社〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
〔大阪支店〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
〔東京支店〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
〔名古屋支店〕
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
〔北陸営業所〕
〒918-8231 福井県福井市問屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967

〔上海西野貿易有限公司〕
中国上海浦東外高橋保稅区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548

〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO., LTD.〕
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng
klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110
☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕
Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend.
Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA
☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社
四国・琴平